

図書館たより

号数 第66号
 発行日 昭和59年10月5日
 編集発行 島根県立図書館
 松江市内中原町52
 TEL (0852) 22-5725
 印刷 渡部印刷株式会社



東出雲町の読書普及

—子ども読書モデル市町村の指定をうけて—

東出雲町では昭和54年より親子読書を開始し、幼児は本好きとなった。このよい習慣が小学生に引き継がれない事を残念に思っていた処、県立図書館では新しく子供読書事業を企画され、本町はその指定を受けた。以下、今日までの足どりを披露したい。

発足と組織 5月頃から県立図書館の先生方に町内3小学校を巡回して、先生や保護者に趣旨説明をして頂いた。希望する地区は多かったが、4グループに絞った。6月から7月にかけて次々と発足した。何れも20人前後の規模で月1回（日曜日）地区の公民館や公会堂を会場とする。親の月当番もきめる。

読書普及指導員 各グループに2～3名配置し全町で10名を委嘱した。全部女性。25才から54才まで平均年令40才。殆んどが家庭婦人で保母経験者が3名。極めて熱心で、奉仕的であるが、幾分の謝礼を贈るよう予算化した。

指導計画 各子供読書会では月別の計画を作った。時には季節の行事をとり入れて楽しく運営するが、お遊びが主体とならないように、読書の興味と楽し

さを味わわせることを基本に考えている。

活動の状況 まだ日が浅いので大きなことは言えないが、○子供達は喜んで参加している。○テーマ図書は熱心に読んでいる。○特に低学年の子供は、豊かな表現をして全体を盛りあげている。○これに比べて高学年の反応は今一つ。それに学校行事や部活と重って出席が悪い。○学校との連絡協調を密にしたい。○子供会行事と同時に行う場合には、行事のテーマに関連づけると一層盛り上る。○子供文庫は民家や集会所に置き、日時をきめて貸出しが、活発に利用している。大人の図書も同時に扱っている。

今後の重点 子供読書会の成否は指導員の熱意と親の関心にかかっている。指導員の研修や情報交換の機会を多く設定し、指導技術の向上をはかると共に、親と指導員とのふれあいを深めていきたい。

全町読書のすすめ これを契機に東出雲町読書推進協議会も結成した。子供読書会や既成の成人読書クラブを拠点にして、全町の各階層の読書活動を一層盛んにしていこうというねらいからである。

各位の御指導と御支援をお願いします。

東出雲町教育委員会

教育長 宮廻勝重

私たちの文庫活動② 嵩見団地子供文庫

藤岡清美

松江市の北部西川津町の新興住宅地嵩見団地に、子供文庫が発足したのは昨年の6月でした。戸数170戸、自治会が出来て8年目の若い団地です。子供の数も結構多く、幼児、児童合せて100名程になります。

我が家3人の子供に、本の読み聞かせを10年程続いているなかで、手近に良い本が沢山あって、小さい時からお母さんに読んでもらっていると、どの子も本好きになることを学びました。しかし、本は最近とても高値になっています。又、県立図書館までは遠く、交通量も多いので、子供だけで借りに行くのはちょっと無理。小さい子でも歩いていける所に図書館があればどんなにいいだろう。幸い団地には、自治会が管理する会館がありました。そこの一室をお借りして子供文庫を作ったら……。そんな夢が広がってきました。

しかし何も無い所からの出発、果してうまくいくものだろうか?「案ずるより生むが易し」団地内のお母さん方に相談すると、積極的に賛同、協力して下さる方が沢山ありました。本や書架を寄贈して下さる方々、本の整理を手伝って下さる方、ポスターを書いて下さる方、寄付をして下さる方々、沢山の人の善意と力添えが寄せられました。自治会からも会館の利用はもとより、わずかではありましたが予算の許可もありて、すべて良い方向に向って、2カ月程で発足にこぎつける事が出来ました。私が昔、高校の図書室に勤めていた事、家庭文庫のお手伝いをしていた事が、いろんな所で役立ちました。しかし、何より力になったのは、県立図書館が、100冊の団体貸出を認めて下さった事で、寄贈本ばかりでは、質量共に貧弱な文庫になる事は目に見えていますので、船出する事は出来なかったと思います。

最初400冊の蔵書で出発した文庫も、現在では、700冊になりました。子供達の活発な利用(一回の

貸出冊数平均40冊)がバネとなって、周囲の理解が増すと共に、新たに寄贈本もいただきました。寄付や廃品回収の収益で、70冊の本を買う事も出来ました。昨年の活動は

- 毎週日曜日の貸出し。(9時半~11時)
- 絵本の読み聞かせや紙しばい。(月1回程度)
- 講演会。(親子読書のすすめ。母親対象に)
- クリスマス会。(島大児研の学生と協賛)

等ですが、どの会も沢山の参加者がありました。子供達も、文庫に本を借りに来たり、行事に参加す

るなかで、遊び仲間が増え、高学年と低学年がいっしょに野球をしたりする姿をしばしば見かける様になりました。

有志の世話人会で運営していた文庫も、今年からは、子供会の運営に変わり、5・6年の子供と、低学年の

保護者が、諸々の事務に当たる事になりました。子供達も貸出しや、廃品回収に積極的に力を出す事により、自分達の文庫だという自覚が生まれつつある様です。一部の有志の好意に頼って運営するのではなく、自治会全体のものとして文庫を受けとめてもらえるようになり、文庫の基礎固めが出来たようどころこんでいます。

悩みは、間借りなので、書架を置くスペースが、限られている事です。専用の図書室がほしい。もっと沢山本を買ってやりたいが資金がない。毎週熱心に借りに来てくれる子供達の期待をうらぎらない為にも、蔵書の充実と楽しい行事を二本立てに魅力ある文庫になるように力を合せてやっていきたいと思っています。

今後共、暖かく見守って下さる様、お願い致します。

所在地 松江市西川津町748

TEL (0852) 24-3870

開館日 毎週日曜日

開館時間 9時30分~11時



お年寄におすすめする本

おじいさんの台所

佐藤慶女著 文藝春秋 1,000円

母の死によって、炊事・洗濯がまるでダメの、父が一人暮らしを宣言した。著者（三女）は、一男四女の子を持つ父が、なぜ83歳になって一人暮らしをしないといけないか、繰り返し考えるが、それしかないと結論を出す。そこで娘は、呆けと老化を防ぐために、父と交換日記を提案する。最初は鬼軍曹と化した娘が、毎日の手順を箇条書にして特訓するところから始まる。が、やがて父も家事に馴れ、自立を図るに従って、近所とのつき合い、老人会への参加と、その行動範囲が広まっていく。しかし、当初は一年の予定だったが、子どもたちの家庭・仕事の事情は好転せず、父は子どもたちと当分同居はできそうにない。果していつまで一人暮しができるか……。

この本では、こうした事情が哀しくもユーモラスに描かれている。核家族化で、老人の一人暮しが増えている今、いろいろな問題を含んでいるが、この本は、その問題をより具体的に、より切実に提起しており、これから老人問題を考えていくのに、大変参考になるであろう。

箱根の坂（上・中・下）

司馬遼太郎著 講談社 各 1,200円

主人公は北条早雲。きわめて魅力的な存在である。室町の末期、一代で関八州に君臨した北条五代の祖早雲は、88歳という当時としては驚異的な天寿を全うしたが、歴史の上によくやく存在を主張しはじめるのは、駿河の興国寺城の主となった45歳からである。それまでの人生はようとしてわからない。それを著者は、流れた身をゆだねた飄々とした姿で描き切る。

そして15年後、60歳にして隣国伊豆を略し、初めて自立するのである。その間、早雲は、あたかも、熟柿が落ちるを待つがごとく一国を手中にする。

これは、大国相模を領するに至るも同様で、その27年後の87歳の時である。そしてその年、眠るがごとく没するのである。天命を知っていたかのごとくの人生である。

待つことを知り、民の心を知っていた戦国の梶雄の息づかいが、著者の見事な想像力によって伝わってくる作品である。

美しい老いの秘訣

田中澄江著 主婦の友社 880円

「老い」という言葉から受けるイメージは、とかく「醜くさ」を連想しがちである。しかしそれは形にこだわるからであって、心の問題についてならば、むしろ美しく老いる人は多いのではないか。

著者は現在73才であるという。世間一般から見ると間違いなく老年である。しかし、若い頃から続けて来た山登りはますます盛んであり、年に40回は登るという。そして日頃死の不安・病の苦しみなどに悩むことはあっても、決して希望を失わないで生きて行けるのは、山登りで学んだこと、つまり、最後まで前進し、登りつづける人生こそが美しいと、自分に言い聞かせているからである。

心の老化—その克服

新福尚武著 社会保険出版社 750円

著者は昭和12年九州大学医学部（精神医学専攻）を卒業し、鳥取大学医学部や東京慈恵会医科大学の教授として活躍された精神医学の権威である。

著者は老人問題について調査研究の機会があり、その折り特に关心をもったのは「精神の寿命」であった。精神というものはどのように衰え、変わっていくか、それにはどんな法則と必然性があるのか等いろいろやっている内に、肉体の寿命でも精神の寿命でも基礎となるのは内臓や脳で、それをしっかりとしないで寿命だけ延ばそうとしても砂上のビルと同じく崩れ落ちるだけである。精神の長寿もまた基礎づくりをしっかりとすることからはじまる。しかしそれだけではなく、老人については特に生き方ということが大事であり、老人がどうしたらよりよく生きられるかなど誰にもわかりやすく書かれている。

老人の心訓の項から

- 老人でいちばん寂しいことは、する仕事のないことである。
- 老人でいちばんみにくいことは、過去にしがみつくことである。
- 老人でいちばん楽しいことは、まだ社会に役立つことができると自覚することである。
- 老人でいちばん美しいことは、若い者の邪魔にならないよう若い者のためになるよう陰の力をつくることである。

わが町の自動車巡回②

西の島町立中央公民館

私の町の地形は、海に沿った一本道を点々と15集落にわかれています。そのうち12地区には書店も公民館図書室のような施設もなく、これらの地区は全くの読書の過疎地域となっております。

こうした地区の人達を対象に、読書を毎日の生活の中にとけこませていこうとのねらいから、自動車巡回による図書の貸出しをはじめました。

月に1回、約300冊を本箱に詰め、町内12地区を巡回して貸出しを行う活動です。一地区での停車時間は30分とし、2日間で巡回しますが、今後、利用者が増えれば停車時間の延長をしたいと思っています。

今まで、遠隔地の人達にとっては、本を借りて読む事が皆無でしたので、自動車巡回を実施し、その予想外の反響に喜んでいます。

当初は、どんな傾向の本が喜ばれるのか、見当がつかず、個人の好みにかたよりがちでしたが、回を重ねる度にそれぞれの地区で読みたい種類の本を聞き、次回にはその要望に応えるよう努めてきました。利用者の多くは外出の少ないお年寄りや主婦で、月1回の巡回車を待ちにしておられるようです。

「いつも、ごくろうさま」「待っていましたよ」等の声をかけていただくと、暑さ寒さも忘れて、ハンドルを持つ手に自然と力がはいります。

又、貸出期間が一ヶ月と長いので、紛失したり、乱雑な取扱いをされるのではないかと心配していましたが、そういう事は全くなく、本好きの人は本を大切に扱うとの認識を新たにしました。それどころか、返却の際、「この本を、他の人に利用してもらって下さい。」と寄贈してくれる人もあり、逆に本は増えつつあります。

昭和58年度よりはじめた自動車巡回も2年目にはいり、一部の地域にはすっかり定着してきましたが、まだまだ本に対して意識の薄い地域が多いのが現状です。

そこで「自動車巡回図書だより」を定期的に発行し、見識を深めていただこうと計画しています。今後、いつでも手軽に利用できる方法（移動文庫等）を検討し、読書人口の増加を期待して普及活動を続けていきたいと思います。

（文責 中川美津子）

NEWS

●昭和59年度市町村読書普及研修会開催

親子読書活動の発展として小学生を対象とした子ども読書活動が本年度からすすめられている。そこで指導員養成を目的に去る7月16日（桜江町）18日（大東町）で研修会が行われた。親子読書の導入指導や子ども読書のすすめ方等の指導があった。後で質議や意見交換があり、各市町村の読書活動状況が発表された。地元の指導者育成ということで今までなく主体的意欲的に受けとめられ、参加者全員終始熱気に溢れていた。

●郷土の歴史講座開く

7月24日（県立図書館）と26日（羽須美村リゾートセンター）の二会場において郷土の歴史講座を開

催。当館職員の藤岡大拙主査と内田融司書が「戦国武将の二つの手紙ー中山鹿介と吉川経家ー」「松江の自由民権運動と青年たち」というテーマでそれぞれ講演があった。身近な郷土の人物や出来事がテーマにとりあげられているので参加者から質問がでたりして郷土の歴史に親しんだ。

●島根県立図書館協議会開催

7月31日、図書館協議会委員7名により、昭和63年までの5カ年間をめどにした「島根県における読書振興策について」協議会側から答申があった。
○親子読書活動を受け継いた新たな子供読書グループの育成
○地域格差解消のため浜田市に西部読書普及センターを設置するよう求めている。